社会学部コミュニケーション学科

S13C189　山崎　由美子

現代における外来語の役割と影響

# はじめに

　現在、日本ではたくさんの外来語が使用され、その種類も増え続けている。なぜこのように外来語が好んで使用されているのか、また、外来語を多用することによる影響にはどのようなものがあるのか、以下に述べていく。本レポートにおいては、日本における外来語についてのみ扱うものとする。

# 外来語の歴史

　「外来語」とは、一般に日本以外の国から入ってきた言葉が国語化されたものを指す。その輸入元の国は多岐に渡り、また、日本の外交の変化に伴い、時代を追うごとに変わってきている。言葉の輸入について最も古い時代に遡れば、中国や韓国から言葉が入ってきており、アイヌ語など日本国土内の少数民族の言葉が日本全土で一般化した例がある。

　しかし、これらは非常に古い時代に日本に入り定着したため、外来語とは呼ばれないことが多い。現在、外来語として認識されるのは、オランダやポルトガルとの国交が始まって以来の言葉である。

　明治時代に入り、開国により外国との国交が盛んになると、一気に外来語の数が増える。これまでのオランダ語やポルトガル語に代わり、新興勢力の英語由来の言葉が加速度的に浸透する。江戸時代に用いられた「ソップ」「ターフル」「ボートル」が「スープ」「テーブル」「バター」に取って代わられたほどである。小説においても、「実に是は有用（ユウスフル）ぢや。（中略）歴史（ヒストリー）を読んだり、史論（ヒストリカル・エツセイ）を草する時には…」とわざわざルビを振り、積極的に外来語を使用するものも現れた。

　第二次世界大戦に突入すると、外来語排斥の時代となった。明治時代から昭和初期にかけて流行した外来語は、敵性語として次のように無理矢理漢字に変換された。

|  |  |
| --- | --- |
| 外来語 | 漢字への変換 |
| サイダー | 噴出水 |
| パーマ | 電髪 |
| マイクロホン | 送話器 |
| コロッケ | 油揚げ肉饅頭 |

第二次世界大戦期に漢字に変換された外来語の例

　その後、敗戦によるアメリカ軍占領により、戦後、外来語が増え続けるのだが、珍しい例として外来語として取り入れられた言葉が完全に漢語に取って代わった例がある。明治初期に盛んに使用された「テレガラフ」「セイミ」は今では「電報」「化学」という言葉になっている。

# 現在使用されている外来語の成り立ち

　現在使用されている外来語にどのような成り立ちがあるか、代表的なものをみていく。

　複数の国から別々に入ってきた例として、ポルトガル語の「カルタ」、英語の「カード」、ドイツ語の「カルテ」、フランス語の「（ア・ラ・）カルト」がある。もとは同じ意味であるが、輸入の経路が異なったためそれぞれが全く別のものを指す言葉として使用されている。

　ゆれ・混乱の例として、「ヒエラルキー（位階制度）」がある。ドイツ語では「ヒエラルヒー」、英語では「ハイアラーキー」であるところを見ると、これは両語の混用であると考えられる。外国人から見れば間違った発音であるが、現在では辞書に載るほど一般化している言葉であるため、日本では正しい言葉であると認めざるを得ない。

　さらに、外来語はカタカナで表記すると長くなってしまうものが多いので、次のように短縮して和製英語を作ることが多い。

|  |  |
| --- | --- |
| 短縮前の言葉 | 和製英語 |
| アメリカンフットボール | アメフト |
| ワードプロセッサー | ワープロ |
| パーソナルコンピューター | パソコン |

和製英語の例

　また、「sunglasses」を「サングラス」、「corned beef」を「コーンビーフ」といったように、複数形の「s」や「es」、過去分詞形の「ed」を省略する例、さらには「cardigan jacket」を「カーディガン」のように語そのものを省略する例も多い。

　海外から入ってきた言葉と日本にもともとあった言葉が融合して新しい言葉が生まれた例も多い。「スクランブル交差点」「ネット配信」「意思決定プロセス」など、例を挙げるとキリがないほどである。

# 外来語を使用するにあたっての注意事項

　外来語を使用するにあたって、外来語はあくまで日本独自の言葉であって「外国語」ではないため、日本国内でしか通用しないということを認識しておくべきである。アメリカに行って、「テレビ」「コンビニ」「パソコン」「ファミレス」「カーナビ」などの単語を使用しても会話が成り立たない。

　言葉が通じないのはまだ良い方である。誤解されて伝わった場合、今後の人間関係に影響を及ぼす可能性もある。誤解される可能性があるのは、外来語と外国語で意味するものが違う場合である。例えば、食べ放題は、日本語で「バイキング」であるが、英語で「biking」は自転車に乗ることを指す言葉である。英語圏の友人をバイキングに誘おうと「Let's go biking on Sunday.」と話すと、サイクリングに誘われたものとしてとらえられてしまう。

# 現代における外来語

　では、なぜこのようにたくさんの外来語が使用するようになったのか。なぜ漢字を使用した日本風の言葉にせず、カタカナ言葉なのか。まず、もともと日本になかった言葉を言い表すのにはそのまま借用してしまえば一番手っ取り早いという、便宜上の理由が挙げられる。さらに、それに加えてやはりカタカナ言葉を使用することによって、かっこいい、新鮮味がある、インパクトがある、しゃれた感じがする、高級だ、といったようなプラスのイメージになることが多いからであろう。

　例えば、アパートやマンションを選ぶ場合、「○○荘」「集合住宅」「長屋」と書かれた建物よりも、カタカナ言葉で書かれた建物のほうが豪華で広い現代的なイメージを持ちやすい。最近では「パレス（palace-宮殿）」「レジデンス（residence-宮殿）」「メゾン（maison-家）」「ハイム（Heim-家）」「カーサ（casa-家）」と名称も多岐に渡り、それらの言葉の頭に「ロイヤル」「ゴールデン」「グランド」「プリンス」などを付け、さらに豪華さを加えようとしたものを多く見かける。

　また、政治の世界においても同様に、カタカナ言葉が多く使用されている。小泉元首相はカタカナ言葉の氾濫を嫌い、「バックオフィス（内部管理事務）」や「アウトソーシング（民間委託）」などの言葉は国民にとってわかりにくいと指摘した。一方、安倍首相は第一次安倍内閣の所信表明演説において「セーフティーネット」「カントリー・アイデンティティー」など109回、小泉元首相の時の4倍もの分量のカタカナ言葉を使用し、わかりにくいとの指摘を受けた。

　確かに、次々と増える外来語はわかりにくいものが多い。そこで、独立行政法人 国立国語研究所を中心として、官報や新聞など、公共性の高い文書に使用される外来語についてわかりやすい言葉を作って言い換えようという動きもある。

# まとめ

　このように、現代において外来語は日常のさまざまな場面で使用されており、我々は特に何かを意識することなく当然のものとして使用している。外来語は新鮮さやかっこよさなどのプラスのイメージを与えることが多いが、外来語が過剰に使用され、わかりにくさや混乱を招いていることも事実である。

　特に、企業や行政は専門知識を持たない一般消費者・国民に対し、伝えるべき情報をわかりやすく伝える義務があるのではなかろうか。外来語が氾濫している現代だからこそ、今一度本当に使用するべき言葉は一体何であるのか、考え直す必要がある。政府を中心とした今後の「言い換え」の動向に注目していきたい。